
神の祈り

紫堂 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の祈り

【Nコード】

N8111Y

【作者名】

紫堂 涼

【あらすじ】

夕暮れ時の一瞬の邂逅 その出逢いが招くのは幸福か、さらなる不幸か。

不運を纏う青年と、それを見守る若き神の物語。

神に祈る事を忘れた青年が差し伸べられた手に気付く日は来るのだろうか

プロローグ

目が、合った。

勘違いで済ませる事は出来なかった。その瞳が……ヒトの持つものではなかったから。

瞳の色は黄^{こがね}金色。細く尖った瞳孔は縦に裂け、獣のようだった。

同じ色を纏うであろう髪は、辺りを赤く染める夕日に照らされ赤銅色に染まっていた。

昼と夜の狭間。逢魔が時と呼ばれる全てが不安定な一瞬。見蕩れている間には夜の領域へと入り込むその間際。

近く遠く聞こえるヒグラシの声。アスファルトから立ち上る熱気さえもしだいに遠ざかってゆく。

絡み合う視線はひたと据えられ、解ける気配はない。紅から藍へと色を変える風景と遠退いてゆくヒグラシの声。鼓動の音が聞こえてきそうな張り詰めた空気なのに、やけに間延びして感じられる。

白昼夢でも見ているのかと、ゆっくりと瞳を閉じる。束の間の薄闇の世界を揺^{たゆと}蕩^{まじろ}う。微^{まじろ}睡^{まじろ}みから覚めるように目蓋を開く。そこには寂れた鳥居だけが佇んでいた。

神のお仕事

社の外から聞こえる賑わいに、自然と眉を顰める。普段は閑散と
しているはずのこの場所が煩わしいほどに賑わう日　　元旦。

普段はその手を合わせる事さえ無いというのに、ここぞとばかり
に祈りという名の欲望を露にするその日。誰もが似た様な欲望を投
げつけて来るのに、御礼参りに来るものがどれほどいるだろう。

厭されたように長蛇の列を見下ろすと、その列の先頭にある社の
主　　八束は鼻で笑う。耳を澄ませてみても案の定、努力を放棄
した欲望だけが渦を巻いている。こうして願う前にできる事がある
だろう。合格したいならば寝る間を惜しんで勉強すれば良い。美し
くなりたいならそのための努力をすれば良い。恋人が欲しいのなら
何もせずに出会いを待つのではなく、積極的に探せば良い。健康に
なりたいたいのなら日々節度ある生活をすれば良い。金が欲しいのなら
さらに働けば良い。誰も彼もが同じ言葉を繰り返す。……合格祈願、
恋愛成就、健康祈願、金運祈願　　。

多くの声で痛くなりそうな頭を抱えて、八束は面倒になつてござ
りと転がる。必死に祈ってそんな奴に適当に力のお裾分けをしてや
れば八束の仕事は終わりだ。こんな膨大な祈りを一つ一つ吟味する
気も無い。

だからだと寛ぎながら早く帰ればいいのに。と懨然としてみると、
心底呆れたと言わんばかりの溜息が八束の上に着ちる。

「……何をしていますのです、八束」

丁寧な物言いと裏腹に、こめかみをひくつかせながら新たに現
れた男は冷たい声を投げつける。

「あゝ？何だよ、こんな時期に他人ん家来んなよ浅葱あひない」

軽蔑の眼差しにもびくともせず、八束はとつと帰れとひらひら

と手を振る。

「貴方は皆の祈りを何だと思っているのです！そんな態度で聞き流していたら、拾うべき祈りさえ取り零してしまいますよ！！」

「うっせえな。どうせみいくんは同じような事しか祈ってねえじゃん。いちいち真面目に相手するほうが馬鹿らしい」

「皆が皆、他力本願なわけではないでしょう！もうこれしか無いと細い糸に縋るような思いでここに来ている人がいたらどうするのですー！！」

「……どうでもいい」

うざい。態度でそう示すと八束はあてつけるように両耳を指で塞ぎ浅葱から顔を背ける。こうやったところで金切り声を上げる浅葱の声を塞ぐことはできないが、聞く気は無いとアピールすることはできる。

「貴方、それでも神の石柱ですか！」

「べつつにー？こんな生まれて長くないカミサマなんて居ても居なくてもいつしよだろう？」

カミサマの部分を馬鹿にしたように棒読みすると、己がその神であることなど石ころほどの価値もないように言い切る。

「それに……俺が在る意味などとうに失せた」

浅葱にも聞こえないほどの声で最後にそう呟くと、話は終わったとわざとらしく寝転がり、瞳を閉じる。もう何も聞くんもりのない八束に、浅葱もまた深く溜息を吐き、先ほどまでの刺々しい声とは一転、今にも消えそうな弱弱しい声で呟く。

「いつか、後悔するんじゃないかと心配なんですよ……八束」

そのかそけき声を耳は拾い上げているのに何も返すことなく、八束はそのまま意識を閉じる。周りを取り巻く人の祈りさえも遮断して。

呼び出し

年の始まりには溢れかえっていた人々の姿はとうに失せた。所詮人間にとつては単なるイベントの一つなのだろう。一方的に願いを告げておきながら、本気で叶うと思っっている者はいないのだ。

「あゝ暇だ」

だらりと鳥居の上に腰掛け、見るともなしに眼下に広がる風景を眺めるのが八束の常である。道を黒く染めるほどの人々の群れの記憶も濃いのに、人通りの少ない社の前は一日に数えられるほどに少ない。

理由も無いのに訪れるものなど皆無で、あれだけいた人間が見事に散らばるものだなあと、ぽつり、ぽつりと灯りはじめた灯りを眺める。

だがその時間は突然の欄入者によって唐突に破られる。

「八束、貴方は相変わらずですね……」

頭が痛い、と。わざとらしくこめかみを撫でる男を胡乱げに見上げると、面倒そうに溜息をつく。

「まあ来たのかよ、浅葱。お前もよほど暇なんだなあ……」

ハア、とこちらもわざとらしく溜息を重ねるが、浅葱はそんな八束の反応など意にも介さず用件を告げる。

「貴方がそんな態度だから心配でついつい立ち寄ってしまうのですがね……」

そうぼやくと、浅葱がさらに渋面で続ける。

「呼び出しですよ、八束」

その一言で、傲岸不遜が代名詞のはずの八束の表情が見事に一変する。

「げ。……俺はお前と会わなかった。お前は何も言っていない」

心底嫌そうな声を上げると、八束が早々に姿を眩まそうと力を行使しようとするが、八束の行動パターンを知っている浅葱が逃すわ

けもなく。力が発動するより先にその首根っこをひつつかむ。

「さ、行きますよ。楽しい楽しいお説教の始まりです。……ああ、瑞貴様みずねがご機嫌でしたから、きつと放してもらえないでしょうねえ……ああ、貴方には良い薬です。素直に絞られていらっしやい」

とん、と軽やかに鳥居から足を踏み出す。その姿は落ちること無く宙で掻き消える。残るは主を無くし幾分精彩を欠いた社のみ。

結果報告

静謐な空気が溢れているはずなのに、そこかしこで和やかに話すものたちのおかげでそんな空気が一蹴される。相変わらず気の抜ける中を浅葱はきびきびと、八束はだらだらと足を進める。

八束が遅れるたびに振り返り睨みつけてくる浅葱に、もう何度目かもわからない溜息で応えながら古めかしい廊下を進む。多すぎじゃないのかと思うほどの扉の数が次第に減り、最後には他より豪華そうな扉が一つだけ残る。

(あゝ……瑞貴の説教は長えんだよな)

このまま帰りたい。その思いを隠しもしないまま、八束は浅葱がノックをしようとするとするより先に、乱暴に扉を蹴り上げる。

「な……っ、八束。流石に度が過ぎますよ！」

「いいんだよ、俺が来ましたよ……って教えてやってんだから」

さすがに怒りを露にする浅葱を余所に、中からの応えを待たず八束は扉を大きく開く。

「はいはい、お呼び出しにより参上しましたよ……っ」と

気怠るそうに八束が告げると、人を殺せそうなほどの鋭い視線が飛ばされる。

「ほう……相変わらず可愛らしい態度だな、八束。何年たっても幼いままで愛らしいこと限りないな」

楽しそうに含み笑いをしながら、八束の行為に動揺など一欠けらも無く返す男の瞳に笑みは無い。この男こそが八束を呼び出した張本人　瑞貴だった。

広い室内には重厚な家具が置かれ、中でも一番目を引く大きな机に瑞貴は鎮座しながら、頬杖を付いて極上の笑みを乗せる。

「さて、何故呼び出されたのかわかってるんだろっな？」

細いフレームに飾られた眼鏡越しに八束を見据えるその瞳は冷や

やかで、問いかけながらも八束の返事など期待していないことが明らかだ。

「……今年の初めのお前の状況だが。参拝した人間のうちの三分の一。それだけの人数に力を与え　　ほぼ成就」

コツコツと机の上に広げられた書類の一部を形良い指先で叩きながら、瑞貴は淡々と記されている情報を口にする。

「受験当日熱が出て、本来は浪人するはずの人間が、補欠とはいえ無事合格。練習に打ち込みすぎたせいでアキレスを断絶するはずの少年は無事地区大会予選突破。夫の浮気が原因で離婚し一家離散になるはずが、妻の妊娠を機に心改めぎこちないながらに縁を繋ぐ」

八束が力を与えたその結果を次々と口に上らせる。皆、無事にそれぞれの幸せを得たようだった。

コツコツコツ、とその間も瑞貴の指先がリズムを刻む。そして最後の一件を口にし終え……コツリ、と一際高い音を立て、指が止まる。

「　　お粗末すぎて話にならん」

聞こえない声

バサリと先ほどまで読み上げていた書類を放る。盛大に散らばる紙片が舞い散る中、瑞貴は最初から聞く気もない八束に目を眇める。「……受験生は己の体調管理不足。同じく陸上少年も自らの限界を知りながらの無謀な行為ゆえの事故。あの一家は妻の妊娠中に反省の甲斐なく夫が浮気を繰り返し、その妻は腹に子を抱えたまま離縁を決意。たいしたもんだ」

「お褒めに預かりどーも」

平然と返す八束に、傍らの浅葱の方が胃がキリキリと痛む。この冷気漂う空間にいるだけで押し掛かるプレッシャーに押しつぶされそうだというのに、さらに八束が空気を重くする。

「もつと耳を澄ませる。本当に必要な祈りを拾い上げずして何のための存在だ」

不遜な八束の態度など相手にせず、瑞貴は淡々と続ける。

「大声で騒ぎ立てるような身勝手な祈りの中に、必ずあったはずの声を、お前は何一つ拾おうとしない。そのでかい耳は飾り物か？」

ギシリと音を立てて革張りの椅子に背を預け、足を組む。さらに腕組みをしたまま瑞貴は馬鹿にしたように鼻で笑う。

「あゝ最近耳掃除サボってて、色々聞こえないんですよねえ、とくにどうでもいい説教とか」

軽く笑いながら告げる八束に、瑞貴は本当に話にならん、と一言呟くとその長い足で重い机を蹴りつける。

硬い音を立てて床のカーペットに波を描きながら机が八束と浅葱のすぐ近くまで飛んでくる。軋む音を立て深く掛けていた椅子から立ち上がると、瑞貴は八束の目の前に立ち、見下ろした。

「いつそお前のその有り余ってる力を、他の奴に投げ渡してやりたいよ」

神としては赤ん坊に等しい八束だが、その力は同じ時期に生まれ
た神の中では抜きん出ていた。だが正しい使い方をしないようでは、
宝の持ち腐れでしかない。だれもがそう感じながらも、最初から聞
く気のない八束にはどれほど苦言を呈しようとも無駄に終わる。

「……お前は、私と出会った時のことを、覚えているか？」

今までの叱責するような瑞貴の口調が、不意に穏やかなものに変
わる。その言葉に、馬鹿にしたような笑みを浮かべていた八束の表
情が無に変わる。

「んなもん、昔すぎて忘れちゃったな」

用件がそれだけなら、俺は帰るわ。皆に背を向け、ひらひらと手
を振りながら八束は部屋を後にする。

……周りの懸念など不要とばかりに。

虚無

浅葱を残したまま、一人己が社に戻った八束は先程の一件が無かったかのように鳥居に腰掛ける。そのままぼんやり暮れ行く町並みを見下ろしていると、珍しくこんな時間に人が歩いているのを見つめる。

夕暮れ時から夜には、寂れた社は不気味に映るのか……その時間帯に人気は無いのが常だ。たまにあるとしても、面白半分にオカルト好きが深夜に現れるくらいのものだ。

「何だ、アイツ。くつれ」

疲れたような足取りでとぼとぼと歩く青年がこちらへ向かって歩いてくる。ここに用でもあるのかと、あまりの情けないツラに気まぐれで願いを叶えてやるうかと鳥居から降り立ち、青年が来るのを待つと、鳥居の前に差し掛かった青年は、そのまま社を通りすぎようとする。

(違うのか)

拍子抜けしたように、八束が帰ろうとした時、不意にその青年と目があった。まるでこちらが見えているかのように視線が絡みあう。

無。

仄暗さを帯びた青年の瞳から伝わる感情はそれ一つだった。

身勝手な欲望も、分不相応な望みも それどころか、夢や希

望。何一つ無い。

(……屍かばねかよ)

生の息吹を感じない。ただ、存在している。それだけのモノにか見えなかった。

暗い瞳を持つものは多い。だがそれもまた、妬みや嫉み、恨みや辛み、負の感情に満ち溢れているものなのに、青年の瞳にはそれさ

えなかった。虚無というのを形にしたらこう在るのだろうか。そう
思えるほど……何も、無かった。

驚愕に目を見開きながら、青年を見据えていると……ゆっくりと、
その黒い瞳が閉じられ、ゆっくりと開く……

再び開かれる瞳を覗き込みたくなくて、八束は一瞬で社の内へと
舞い戻る。

（あれが、人の心か……？）

何一つ強い感情は無く、いったい何を糧に生きているのだろうか、
何が楽しみで生きているのだろうか。ああ、でも……

「一つだけ、感情があったな」

それはやはり強いものではなく、感情の残滓のような、幽かなも
のでしかなかったけれど。

諦らめ。僅かにその感情だけが青年の中にあつた。

奇立ち

あれから、あの青年が通ることは無かった。

「あの辛気臭えツラ見なくていいじゃねえか」

人間がどんな顔をしていようが、構わない。ここに来ないなら自分には関係無い。ただちょっと嫌な事でもあつたんだろう。そう思うのに、あの何の楽しみもありませんってなツラが気に入らない。（自分だけが辛いですってな、あのツラがムカつくから気になるんだ）

そんな自己陶醉さえも皆無だったのを承知の上で、八束はそう決め付ける。だが……

「……」

「じろり。」

「……」

「じろり。」

「……っ！あぁ、面倒臭え！！」

「ごろごろと転がっていた八束が奇立ったように立ち上がると、そのまま姿を掻き消す。」

（どこにいるんだ、アイツは！！）

そうそう、あんな瞳を持つ者はいない。もう一度見てみて、普通の瞳をしていたら、それでいい。そうしたら、このもやもやした感じは消えるだろう。だから、とつとつそのツラ見て、忘れてしまおう。

そうして八束はふらりと町を彷徨いはじめる。

ひよい、と通り過ぎる車の上に降り立ち、流れる景色を眺める。

と、とん。と次々と車の上を跳ね回り、町中を探すが中々見当たらない。

(とつとと出て来い！)

相手は八束が自分を探している事さえしらないのに、文句を言いながらも探すのを止められない。自分のテリトリーの境界あたりまで行っても求める姿は見当たらず、八束は次第にこうやって探す行為に飽きを感じ、溜息を吐くと車から飛び降り、ふらりと社へと向かい歩き出す。

しょせん、単なる気まぐれだ。飽いてしまえばどうでも良い。

八束はぶらぶらと、今度は辺りに視線をやることもなく散歩に興じる。うにゃん、と鳴く馴染みの猫の頭を撫でてやったりしながら歩いていると、向かい側から近づいてくる影に気付き、顔を上げる。

(げ……っ！)

探すのを諦めた途端、出やがった。

「……………」

今度は視線が合うこともなく、擦れ違った青年の背を、八束は振り返る。

「……………やっぱり、ムカつく」

擦れ違う時に垣間見た人間の瞳には、相変わらず色が無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8111y/>

神の祈り

2011年12月3日23時52分発行